

〔I〕創作ダンスの指導

北 田 明 子

序

日頃体育の授業を行なっていて問題として感じられる事は様々であるが、今回は次のような問題に焦点をあてて考えてゆきたい。すなわち、授業に対する生徒一人一人の参加の仕方についてである。数十人を一クラスとした授業の場合、まず共通の目標が設定されるが、この目標に対して一人一人は具体的に自分自身にとっての目標を決め、自分なりに解決の努力をすることが要求される。到達基準を設定したり、競争の要素をとり入れたりするのは、個人個人に目標を明確に意識させ、意欲を高めるための方法である。授業の形態が一斉であろうとグループ学習であろうと、生徒一人一人にとってみてどのように授業がかかわりをもったかが、その授業の成功・不成功の大きな鍵であると思う。一人一人の参加ということについて、体育が身体活動であり、実際に身体を動かさなければならないという点では他の知的活動よりとらえやすい。たとえば、徒手体操を一斉にやる場合でも、一人一人が行なっているかどうか表面的には見分けられる。しかしこれを準備運動として行なう時には、必要な身体の部位を必要な強さで行なっているかどうかが問題であり、そうなるとこれは、行なっている生徒の一人一人が目的を内在化しているかどうかにかかっている。同じようにやっているように見えても、実はやっていないことが多いのである。グループ学習になると、なお一層個人の意識はとらえにくい。どの教材でも、教師の設定した授業の目標をどうやって生徒一人一人のものにするか、特に高学年になるほど大きな課題となってくる。一般に、高学年になるほど“やりたい”運動教材が限定されてくる傾向にある。“好き”な運動が教材である場合には、当然のことながら学習意欲が高い。バレーボールがうまくなりたいと思っている生徒ならば、単純なパスやサーブの練習にも意欲的であるし、より高度な技術の練習にも熱心である。問題は“たいしてやりたくない”或は“嫌いな”運動教材の場合である。(この場合、なぜ嫌いなのか、どうすれば嫌いでなくなるのか、本当に嫌いなのか、などという問題は他の機会にゆずりたい。)

本論では、高校女子・ダンスの授業をとり上げて考察を加えながら、上に述べてきたような問題意識の中

で望ましい授業のあり方を追求してゆきたい。

I 創作ダンスの授業の位置づけ

創作ダンスは体育の内容の中で、男子の格技に対する女子のための教材として特殊な位置を占めている。運動の特質から見ても、他の運動が主として競争・闘争の要素や鍛練の要素が強いのに対し、表現であり、感動の共感であり、仲間との協調性を特に要求されるという点で異なっている。指導要領に示されているダンスに対しての授業時数の割合は15%～35%であり、扱われている内容はフォークダンスと創作ダンスである。そして創作ダンスは「個人または集団で、日常生活経験から得た感情や思想を、律動的な身体運動によって美的・創造的に表現する」※ ことをねらいとしている。このような創作ダンスのねらいを具体的に授業として展開しようとする、種々多様な問題点が浮かび上がってくる。たとえば、○表現力を高めるために必要な律動的な身体運動の能力や美的感覚をどうやって養うのか。○年齢や経験による表現能力に応じた指導はどうすればよいのか。○“創造”のためには最少限どれだけの、どんな基礎練習が必要なのか。○身体表現に対する心理的抵抗をとり除くにはどうすればよいのか。○良い作品というのはどのような基準によるのか。○評価はどうするか。等々で、これらの問題はどれも教科の教材研究の課題として追求しなければならない。しかし本論では先に述べた問題意識に基づき、一般的に生徒にとって“たいして好きでない”あるいは“嫌いな”教科になりがちである「ダンス」の授業をいかに成功させるかという角度から考察してゆきたい。

II 高校女子を対象にした創作ダンスの計画

1) ねらい

- ① 日常生活経験から得た感動や考えをグループで表現する。(よい作品をつくる)
- ② 生徒一人一人が創作活動に積極的に参加する。

※ 高校教科指導全書・保健体育, 山川岩之助他編, 学事出版, 1974, P.158.

(集団の中で個人を生かす)

③ 協力して作品をつくりあげることにより、表現の楽しさを知る。(成功感)

そして、さらにできればこれらの経験が生徒一人一人に内面化され生活態度としての自己表現や創造への意欲に結びついてゆくことを目標としたい。

2) 方法 (時間配分)

高1～高2の時期にダンスの単元として4単元行なう。

第1単元：高1 2学期 (5時間) ※

ダンスのための身体づくり。柔軟体操、基本運動、即興練習。

第2単元：高1 3学期 (8時間)

二人グループによる簡単な創作。作品の発表と鑑賞。

第3単元：高2 2学期 (8時間)

既成作品の練習と演出。同じ動きをお互いに練習し合うことで、動きの質と量を高め、表現力を養なう。

第4単元：高2 3学期 (9時間)

5～6人グループによる自由課題の創作。発表鑑賞。

※ () 内は実際に行なった授業時数

III 51年度高2ダンス 第4単元の授業展開

時間	計 画	展 開		
		教 師	生 徒	
9 時 間	1 オリエンテーション	前年度の8m/mフィルム 目標の説明 創作手順の説明	} による導入 目標の理解 創作活動の概要の理解 グループ作り	
		テーマについての助言		テーマの話し合い・テーマの決定
	2 ～ 5	創作及び練習	グループ毎に、内容のとらえ方、動きのアイデア等の助言・指導	話し合いながら、中心になる動き作り、フレーズ作り、全体の構成と練習
				時間外に練習 (早朝・放課・自習時間等)
	6	発表・鑑賞 相互評価	相互評価票の作成 各グループに対して講評・助言	作品の発表 相互評価と助言
7 ～ 8	改良・練習	相互評価票の返却、改めて助言	他のメンバーからの助言や評価を参考に改良、練習	
9	合同発表会※ 8m/m撮影 反省	評価・8m/m撮影・総括 アンケート実施	発表・鑑賞 アンケートによる反省とまとめ	

※ 高2女子は2クラスに分けて授業を行なっているので、最終時のみ合併して全員で行なった。

IV グループが決定したテーマと内容

テ ー マ	内 容※
ハラハラサーカス	ピエロのおどり、楽隊のパレード、ハラハラするつなわたり、などを中心にして陽気でスリルあふれるサーカスの気分を表現する。
狂 言	能や歌舞伎にみられる日本的な舞踊の型を動きにとり入れ、アメリカ的なモダンな動きと対比させる。

たものである。従って、低く評価された作品も、当日メンバーが欠席していて十分表現できなかったものだったり、その後の改良で非常によい作品に出来上ったものもあり、絶対的なものでないことは言うまでもない(表2)

一番困った時	%	作品											
		A※	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
イ. グループを決める時	0												
ロ. テーマを決める時	23				1		5	2		4	1	2	
ハ. 中心になる動きを決める時	33		3	1	3	5		1	4		1	2	2
ニ. 全体を作品としてまとめる時	33	4	2	4	2			1		1	3	1	4
ホ. 練習の時	9	2					1			1	2		
ヘ. 発表の時	2	1											
ト. その他	0												

※ A～Lの記号はIVのテーマの順番と一致していない。

グループ別にみると、メンバーの感じ方がだいたい一致している場合と、バラついている場合がある。作品Fは、今回の作品中最も良いと思われる作品の一つであったが、このグループではテーマの決定までに何回も助言を受けて話し合いを重ね、全員が納得して取り組んだものである。一方作品Iは、同じくテーマについての話し合いを重ねたけれど、結局話し合いを徹底せずに動きづくりに入ってしまったもので、結果的にあまり満足できない作品になっている。これらは、テーマ着想の作品への影響の典型的な例であろう。

生徒の相互評価の結果が、教師の評価の結果とほとんどズレがなかったのも、目標が生徒に理解されていたためと言える。生徒の相互評価では、平均点が25.1～20.5点与えられたが、それぞれの作品はかなり個性的であり、どれも平均して良い作品であったことがうかがえる。

2) 一人一人が積極的に創作活動を行なう

この目標に対しては作品の良し悪しからは判断できない。グループとして良い作品が完成しても、一人一人を見た場合に、創作活動を実質的に行なったか、また、本人にそう自覚されているかが問題である。テーマを決める段階から発表の段階まで、グループの一人一人が自分の事として目標をとらえていた場合にはじめて、自分達の作品であるという共通の感激をもつことができよう。

表3は、作品の中に自分の動き(動きについての意見も含めて)がどの程度生かされたと考えているかを示したものである。全体的にみると77%以上の者が大いに生かされた、ある程度は生かされたと感じている。また、グループ毎のメンバーの意識を平均して、全員が大いに生かされたと思っている場合を100としてみ

い。

また、表2は、作品を創っていく時一番困ったのはどういう時かをまとめたものである。

ると、生かされたという感じの低いグループで68、高いグループで84にもなる。12のグループを平均すれば76になり、相当高い程度で自分の動きが作品に生かされたと感じている。一方、あまり生かされなかったとするものも7%弱あるが、彼女らが創作活動をしなかったとは言えない。全く生かされなかったと答えた者は0%である。

(表3)

自分の動きは生かされたか	人数	%
イ. 大いに生かされた	7	12
ロ. 少し生かされた	39	65
ハ. わからない	10	16
ニ. あまり生かされなかった	4	7
ホ. 全く生かされなかった	0	

同様に、表4はメンバーの参加の仕方についてである。

(表4)

動きへの参加	人数	%
イ. 皆でワイワイ言って作った	36	60
ロ. 一人の人が中心になって作った	2	3
ハ. 二～三人の人が中心になって作った	14	23
ニ. 一人一人が部分を分担した	4	7
ホ. その他	4	7

皆でワイワイ言って創ったと答えたものが全体の60%を占め、次に多い2～3人でという答えの23%をはるかにしのいでいる。グループ別に見てもワイワイ型

が多く、2～3人型、混合型が次に多い。ワイワイ型に対して2～3人型は、動きに自信のあるリーダーがいたためにこのようになったもので、同時にワイワイもやり、部分も分担し、という型になって、チームワークはとれていたと思われる。これに対して、グループ内で意見が分れている型については、総合的にみて、チームワークに問題があったのではないかと思われる。いずれにせよ、ワンマン型はほとんど認められないと言ってよい。全体的にみて、グループ内の人間関係は、かなり望ましい状態となっていたと言えよう。

(表5)

作品完成に対する貢献度	人数	%
イ 100%近く貢献した	1	2
ロ. 70～80%ぐらい	7	11
ハ. 50～60%ぐらい	20	34
ニ. 20～30%ぐらい	31	53
ホ. 0%に近い	0	0

(表6)

自分の作品に対する満足度	%	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
イ 大いに満足	11	1					2					2	2
ロ. まあ満足	60	2	5	1	4	5	3	4	2	1	3	2	3
ハ. 何とも思わない	8			1	1				1		1	1	
ニ. やゝ不満足	17	1		3					1	3	1		1
ホ. 全く絶望的	4	1								1			
全員が大満足の場合を100として		64	80	52	76	80	88	80	65	44	68	84	80

(表7)

創作している時の感想	%	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
イ. とても楽しかった	15		2		1		3				2		1
ロ. まあまあ楽しかった	59	2	2	4	2	4	2	3	3	3	1	4	5
ハ. 何とも思わない	5	1	1						1				
ニ. 少しいやだった	20	2		1	2	1		1		2	2	1	
ホ. とてもいやだった	1	1											
全員がとても楽しかった場合を100として		53	84	72	68	72	92	70	75	64	72	72	83

表6では、約70%の生徒が作品に対してかなり満足した気持ちをもっているし、表7では、創作している時、とても楽しかった、まあ楽しかったを合わせると74%に達する。このことから、一応創作の満足感を得られたと言えるのだが、一方、自分の作品に対して絶望的であるとする者や、創作活動が大へん苦痛であったとする者がみられる。創作がいやだったという理由を見ると、自分の思うように動きが創れない、創作がむづかしい、中学の時はもっと色々と考えついた、皆と気

さて、表5は、作品の完成に対して自分がどの程度貢献した（動きづくり、指導、協力、練習、アイデア等、全体的にみて）と思うかを示したものである。表に示される通り、20～30%の貢献度だと思ふ者が過半数を占めている。この数値は予想より低いものであるが、表4の結果と考え合わせると、やはり一人一人がよく活動したと受けとめてよいと思う。ここでも0%に近いと思った生徒はない。

3) 作品を創作した満足感を得る

作品を完成したあとに満足感を得られなければ、創作ダンスを行なう意味はうすれる。イヤなものが終わってホッとするというだけの感情でもあまり意味はない。創作ダンスで満足感を感じることを目標の一つにしたのは、作品を完成させ発表することにより、作品の出来ばえや創作し表現することや、友人との親しいつながりなどの要素が複合された充実感を得ることに意味があるからである。表6は作品で満足できたかどうか表7は、創作をしているとき楽しかったどうかに答えたものである。

が合わない、ダンスはもともと好きでない、出来上らないのではないかといつも不安で、などである。これらに対応して、グループの作り方、基礎的運動の練習、心理的抵抗の除去などの問題が再び浮かび上がってくる。しかしまた逆に、ダンスに対する意欲が高くても、作品への要求水準が高く、相対的にはかえって否定的・消極的になっていくという場合があることがわかる。

チームワークについては、だいたいどのグループも満足できる状態であったと言える(表8)。7表と8表

から、今回のチームワークの最低線としては「みんなとあまり気が合わなくて創作は少しいやだったが、チームワークとしてはまあまあうまくいった」という奇妙な状態であろう。これはあまり望ましい状態ではないが、時間をかければ意欲そのものもよい方向に向う可能性がある。

(表 8)

グループのチームワーク	人数	%
イ. とてもうまくいった	12	20
ロ. まあまあうまくいった	43	71
ハ. よくも悪くもない	4	7
ニ. あまりうまくいかなかった	1	2
ホ. まったくダメだった	0	0

表9は、これまで行なってきたダンスの4単元について、それぞれの時の感想を◎○△×××であらわしたものである。今回のグループ創作だけについてみると◎や○の感想をもつ者が多くなっており、結果的には今回の授業はかなり成功した例と言えるだろう。

(表 9)

単元	感想	◎	○	△	×	××	※
1. 基礎練習		3%	33	48	13	3	64
2. 2人の小品の創作		17	38	30	12	3	70
3. 既成作品		27	46	22	3	2	79
4. グループ創作		25	55	20	0	0	81

※ ◎が100%の場合を100とする指数

IV 創作ダンスの授業の問題点と

今後の課題

創作ダンスの授業を行なうには常にためらいがある。ダンスは好きでないと思っている生徒が多い上に、好きだからと言って必ずしも良い作品は生まれないが、嫌いなままではやはり良い作品が生まれず、結局、創作による楽しさも味わえないまま、ダンスを授業でとり上げる意味そのものがうすれてしまうことになりがちだからである。

しかし、「最初は創作ダンスというものをむずかしく考えすぎているのではないかと今になって思う。創作ダンスの意義の一つとして、みんなが楽しんで心か

らわきおこる感情を率直に身体で表現することであると思った。真剣にとり組めば、予想以上のものも生まれることがあるのだという事を感じた。」このような感想を実感をもって書く生徒があるという事のうちに今回の授業の意義を見出す思いである。

高2のダンスの授業はまずまずの成果をあげたと言ってきたが、それ以上に、問題がより明らかにされてきている。最初に考えた教科的な問題の他に、たとえば、いかにして一般的な能力としての創作性を高めるのかといった問題がある。さらに、生徒の創作性や表現力が高まっていった場合、教師の側からの適切な助言が行なえるためにも、教師自身の創作性を高める必要があるが、これをどのようにして高めてゆけるのかというのも切実な問題である。今回でも、生徒が創作活動を行なっている場面で適切な助言が行なわれたかどうかはとらえられない。創作ダンスの場合は、ヒントになる一つの言葉や一つの動きが示されるだけで、作品全体の方向さえ変ってしまうことがある。さらにまた、この場合適切とは、生徒のイメージを生かすのに必要な助言であり、そのためには、生徒の感情や思考を十分理解しておかねばならない。つまり、日常的なふれ合いがなくては、高校生の柔軟な見方を表現に導びく「適切な」助言・指導は行なえないであろう。

このことは生徒同士でもあてはまる。「二人で創るダンスは話し合いがゆきとどく。二人以上のグループでは痒いところに手がとどかないといったようなところがある。」という感想が示す通り、何人かのグループで創作を行なおうとするなら、一人一人の意見が出し尽され、お互いが十分納得し合った上で作品が生れてゆかなければならない。全体を生かしながら個を生かすことが、グループ創作の理想だからである。

従って、チームワークも、全人格的なふれ合いの中で育てられなければならない。そして、もし望ましいチームワークが得られたなら、そのつながりは全体的な学習の環境として学校生活のいろいろな場面に影響を及ぼすことになるだろう。

授業に対して一人一人の生徒がどのように問題意識をもち、解決の方法を考え、解決していくかは、その生徒自身の問題の受け止め方・一つの態度であり、自主性とか生き生きとした生活態度に結びついてゆくものであると考える。そして今後とも、ダンスの授業に限らず、生き生きとした授業、自主的な活動を促す授業を目指してゆきたいと思う。